

2017年(平成29年)4月6日(木曜日)

日本文学の豊かさ体現

古典の恵みへ思い強く

大岡信さん死去

評伝

五日死去した大岡信さんは、豊かな感受性を映す現代詩の創作と、日本の古典文学を斬新な視点で再評価した評論を、多数著した。その文学活動を通じて日本文学の豊かさを体現する存在だった。「詩と批評は車の両輪です」と持論を語る姿は、揺るぎない信念を感じさせたものだ。

面参照

歌人の父を持ち、少年時代からフランスの詩人ボードレールや新古今和歌集に親しんだ。第一詩集「記憶と現在」は、新鮮な叙情と先端的な芸術性が合致した

と評された。

一九七〇年代からは古典への関心を著作として結実させ、評伝「紀貫之」では古今集の意味を捉え直し、高く評価された。以後、岡倉天心や菅原道真、萩原朔太郎ら先人の評論も次々と発表した。

古典から受けた恵みの上に自身の仕事を位置付ける人だった。普段は明晰(めいせき)な話し方で知られたが、取材で文学観を聞いている時に、ふとこんな心情を漏らしたこともある。「千年前、千五百年前の人たちを含めて、私を助け

てくれた大勢の力に非常に感謝している。自分はほんのちっぽけなもので、その外側に膨大な人の輪、つながりがある。幸運だった」この気持ちで、文学を仲立ちにして多くの人と関わ

る道を選ばせたのではない。日本ペンクラブ会長や連詩を作る活動に奔走。詩歌を平明簡潔に解説するコラム「折々のうた」などの著作で、詩歌の面白さを分かりやすく紹介する仕事にも精力を傾けた。大岡さんが終生携えていたものは、生前語っていたように、時空を超えて人間

の感動を伝える「言葉の持続性」への敬意だったことが分かる。二〇〇三年に文化勲章を受けた時には「まともな日本語を書きたいと、ずっと思ってきた」と述懐した。日本語の特徴を「柔軟性、論理性、簡明にして多義的な豊かさ、そして鋭利さ」に見て研さんを積んだ文学者ゆえの感慨だったのだろう。

(共同・杉本新)



文化勲章受章の喜びを語る大岡信さん(2003年10月)

大岡信さんの主な作品

1969年	評伝「 ^{とうじ} 蕩児の家系」(藤村記念歷程賞)
71	評伝「紀貫之」(読売文学賞)
78	評論「うたげと孤心」
79	コラム「折々のうた」(2007年まで、菊池寛賞)
89	詩集「故郷の水へのメッセージ」(現代詩花椿賞)、 評論「詩人・菅原道真」(芸術選奨文部大臣賞)
91	評論「 ^{たのしみ} 連詩の愉しみ」
2004	詩集「連詩 闇にひそむ光」

「巨星落つ」との思い

日本現代詩人会理事の八木幹夫さんの話 巨星落つという感じだ。大岡信さんのおかげで、自分の作品が、伝統の中でどう位置付けられるのか、認識できた詩人は多いと思う。日本文学にも美の伝統があったと、持ち前のグローバルな目で改めて取り出してみせた。一年前に私が書いた大岡信論を非常に喜んでくれ、奥さまが代筆したお手紙をいただいたばかりだった。

詩論、文学論は教科書

詩人荒川洋治さんの話 詩と批評における先達で、大きな穴があいたようだった。古典から現代詩まで幅広い文学作品を批評してきた大岡さんの詩論、文学論は、一世代若い私たちにとっては教科書のようなもの。大岡さんほど繊細、かつ明解に読み解く方はいない。大岡さんの大きな遺産を、私たちがしっかりと読んでいかなくてはいい。